



## 見比べてみよう ～原作と絵双六～

当館所蔵の双六『五十三驛滑稽膝栗毛道中圖會』の元になっている『東海道中膝栗毛』には挿絵があります。双六と原作にどのような違いがあるか、見比べてみましょう。

※原作の挿絵はすべて『東海道中膝栗毛』（日本古典文学大系 62 岩波書店 1958）から引用した。

### 1. 小田原の五右衛門風呂

『東海道中膝栗毛』（原作）



『五十三驛滑稽膝栗毛道中圖會』（双六）



### あらすじ

小田原で宿をとることにした二人。その宿の風呂は、五右衛門風呂だった。五右衛門風呂の場合は、蓋のように上に浮いている底板を下へ沈めて入る。そうとは知らず、弥次さんは板をとって入ろうとする。すると直接足が釜に当たり、あまりに熱いので、近くにあった便所の下駄を履いて湯に入ってしまう。そこに喜多さんが待ちかねて覗きにくると、弥次さんはもう鼻歌を歌ってのんびり入っている。（原作の挿絵）

弥次さんは、上がるときに下駄を隠し、喜多さんが入り方をたずねてもとぼけるが、喜多さんもそのうちに下駄を見つける。

喜多さんも下駄を履いて入っていたものの、だんだん熱くなってきて、立ったり座ったりしているうちに、湯船の底がぬけてしまう。駆けつけた宿の亭主に「下駄を履いて風呂に入るとは」とあきれられてしまうのだった。（双六の挿絵）

絵  
双  
六  
で  
め  
ぐ  
る  
旅

## 2. 二人の座頭

『東海道中膝栗毛』（原作）



『五十三驛滑稽膝栗毛道中圖會』（双六）



### あらすじ

塩井川を渡ろうとすると、橋が落ちたのか皆徒歩で渡っている。弥次さんと喜多さんも渡ろうとしたところ、ちょうど二人連れの座頭・猿市と犬市に出会う。二人は、拳で負けたほうがもう一人を背負って渡ろうとしていた。

猿市が負け、犬市を背負おうとしているところに、弥次さんは代わりに負ぶさってしまう。猿市は目が見えないため別人と気づかず渡してしまう。（原作の挿絵）

犬市も目が見えないので、代わりに弥次さんが渡されたことに気づかず、どうして渡してくれないのだと文句を言う。猿市はいぶかりながらも戻り、再度渡そうとする。そこへ喜多さんが弥次さんの真似をして負ぶさるが、今度は渡りきる前に気づかれ、川の中に落とされてしまった。（双六の挿絵）

このあとの掛川の宿で、二人はまた猿市・犬市に出くわす。喜多さんは、川に落とされた意趣返しをしようと、彼らの酒をこっそり盗み飲んでしまう。ところがこれを子どもに見られており、しっかり酒代を払う羽目になるのだった。



絵  
双六  
で  
めぐる  
旅

一  
駅